

令和七年度冬季

全国大学国語国文学会 第一三三回大会案内・要旨集

期日
会場

十二月十三日（土）・十四日（日）・十五日（月）

武庫川女子大学 中央キャンパス（対面とNoonによるハイブリッド大会）

〒六六三―八五五八 兵庫県西宮市池開町六―四六

交通アクセス…阪神電車「鳴尾・武庫川女子大前」徒歩約7分

令和七年度冬季

全国大学国語国文学会 第一三三回大会（対面とオンライン〈Zoom〉によるハイブリッド大会）のご案内

○参加を希望される方は、本学会ホームページ（<https://zenkoku-sjll.org>）の「次回大会案内」のページにある参加申込フォームより、十二月一日（月）までにお申し込みください。

○申し込まれた方には、申込締切後にメールにて参加情報をお伝えします。

○感染症の拡大状況等によっては、全面オンラインに変更となる場合があります。

○出張依頼状のご依頼は、学会事務局・大会担当までご連絡ください。

（学会事務局）〒七〇〇―八五一六 岡山県岡山市北区伊福町二―一六―九

ノートルダム清心女子大学文学部 東城敏毅研究室内 全国大学国語国文学会事務局・大会担当

学会事務局メールアドレス office@zenkoku-sjll.org

○大会についてのお問い合わせは、下記アドレスまでご連絡ください。

大会用メールアドレス conf@zenkoku-sjll.org

第一日 12月13日（土）

代表委員会（11時～12時）

会場 文学2号館5階 L2―53教室

委員会（12時15分～12時45分）

会場 文学2号館5階 L2―53教室

会場 武庫川女子大学中央キャンパス 文学2号館1階 L2―11教室

受付 12時45分～（Zoom 開場 13時～）

開会 13時30分～

学会代表挨拶

会場校挨拶

明治大学教授

小野 正弘

武庫川女子大学学長

高橋 享子

大会シンポジウムテーマ

地域文化の継承と享受——学習・読書・出版文化——

各地域にのこされた史資料には、その地域の社会・経済の実態がうかがえるものだけでなく、文学碑や旧家にのこる蔵書、往來物としてのこる教科書など、時期や地域によつては多様に保存されてきている。例えば、これらから、その時期以前の文学作品がどのように享受されてきたのか、国語をどのように学習していたのかなどをつぶさに観察でき、さらには、蔵書をめぐるその地域の人びとの関わりまで紐解かれることもある。

これらは、その当時の地域文化の継承と享受の実態を具体的に把握する上でも好個の資料群である。近年、資料整理や翻刻、調査・分析等、研究成果の蓄積、公開が進みつつあり、これらの調査成果が各地域・時代における文化の継承と享受の実態解明に新たな可能性をもたらしてくれると思われる。

本シンポジウムでは、文学、語学と教育、地域史等の異なる領域の知見を集積しながら、地域文化の継承と享受を考える上で、これらの史資料をどのように位置づけ、分析していくことができるのか、新たな視点からその可能性を探っていきたい。

趣旨説明（13時45分～13時50分）

コーディネーター／司会

武庫川女子大学文学部歴史文化学科准教授

井上 幸

シンポジウム（13時50分～17時50分）

古典和歌による地域振興・地域保全——万葉歌碑など——

武庫川女子大学文学部日本語日本文学科教授

影山 尚之

故・犬養孝の揮毫になる万葉歌碑がいまや一四一基を数える。犬養自身の意思というよりは、師を慕う人たちの強い願いによつて日本各所に設置され続けるのだが、最初の碑は昭和四十二年十一月、明日香村甘樫丘中腹に建立された。時代は高度経済成長期のさなかであり、歴史的景観を留める地へも次々に開発の波が押し寄せ、ついに甘樫丘上にホテル建設の計画が持ち上がったという。犬養万葉歌碑はかかる暴挙を抑止する意図を蔵していた。

ここにち、明日香村を訪れる人々のうち歌碑に高い関心を示す人は限定的であろうが、観光客向けイラストマップの類にはきまっ

てそのマークが記されており、碑を背景にして写真撮影する光景が見られもするので、故地散策にあたつてのひとつの有効な道しるべとなっているのは確かだ。世界遺産登録を目指す同村にあつても万葉歌碑はアピールの要素の一つであると聞く。地域文化の保全と活用、ひいては地域振興に寄与するところがあるとするなら、犬養の遺志はそれなりに継承されている。

本報告では、会場校の立地する阪神地域に点在する万葉歌碑を糸口にしながら、地域社会における古典和歌の利活用について考えてみたい。歌を碑に刻んで設置するに際しては、歌内容の吟味はもとより、該当歌に対する歴史地理的考証が不可欠であり、古典和歌研究者に閑与の余地があるとすればその点にあるだろう。また、「地域版百人一首」と呼ぶべき撰歌集がいくつかの地域で作成されている。報告者自身が関係した事例を含め、ここに紹介してその問題性について寸考する。

地域史料にみる書籍の出版・流通——福岡町三木家・懷徳堂を中心に——

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター学術研究員 石橋 知之

日本では17世紀以降、本屋による商業出版が隆盛した。書籍は三都（京都・江戸・大坂）の本屋仲間を中心とした商業出版によって膨大に生産され、広く社会に流通した。次第に本屋は地方城下町をはじめとした列島各地で営まれるようになり、18世紀後半から19世紀には広域的な書籍流通網がみられるようになったといわれる。

しかし、書籍の流通環境は日本社会全体で一様であつたわけではない。書籍の享受者が置かれた地理的条件や居住地域の本屋の営業状況、多様な人間関係に基づく入手経路（貸借・筆写）など、様々な要件の下で各地各様の書籍入手のあり方が展開していた。このため、書籍流通や本屋経営の実態を解明するためには、各地域に残る旧家の史料群から書籍購入・貸借の記録類や蔵書目録、そして蔵書そのものなどを分析する必要がある。近年、そうした各地の事例分析は蓄積されつつあるものの、今なおほとんどの地域では十分に研究されていない現状にある。

また、江戸時代は自由な出版・流通を許された社会ではなく、幕府による本屋への統制や取締りによって制限されていた。そのため出版されず写本として流通する書籍も多数存在した。しかし、幕府の出版統制は時代によって変遷するものであり、必ずしも統制の引き締め一辺倒であつたわけではなく、天保改革期には部分的な規制緩和の動向もみられた。支配権力側の動向が出版・流通にどれほど影響を与えたか、という点もまた、近世社会における書籍や本屋の歴史的位置を探るために解明すべき課題の一つで

ある。

以上の問題意識のもと、本報告では現兵庫県福崎町に所在する旧家三木家に残る史料群を分析対象とする。天保・安政期の同家当主通深は大坂の懷徳堂に入門し、同舎を主宰した中井竹山・履軒兄弟の著書を多数収集していた。その中には『逸史』や『草茅危言』等、従来は出版統制に抵触したが、天保期以降に出版された書籍を含んでいる。限定的な写本流通から合法的な出版流通への転換期に、大坂の学問文化がどのように地域社会に広まったのかを捉える試みとしたい。

地域の言語文化形成の背景——往来物から考える——

武庫川女子大学文学部日本語日本文学教授・弘前大学名誉教授 郡 千寿子

歴史学の小川剛生氏（慶應義塾大）が「往来物は文化史研究では等閑視されてきた」、国文学の母利司朗氏（京都府立大）が「往来物版本は非文学資料という性格上、等閑にふされてきた」（科研費データベース）と述べるなど、研究分野によつては往来物はいま注目をされてこなかった。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類であるが、江戸時代には多種多様なものが出版されている。実生活にどのようにこれらの資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に調査をすすめてきたが、その一端を紹介することで地域文化の継承と享受を考えることにつなげたい。

東北の秋田県立図書館所蔵の往来物は、関西から距離的に遠いにも関わらず、江戸に比して大阪や京都出版の資料が多数であった。山形の酒田光丘文庫所蔵の往来物も京都・大阪といった関西出版が多く、内陸の弘前や山形との違いが顕著であった。秋田も酒田も日本海沿岸に位置し、江戸時代に興隆した日本海航路、北前船の寄港地である。北海道や東北の鯨や昆布といった海産物等を関西に運んだ北前船は、関西からは書籍といった教育資源や文化を日本海沿岸にもたらしたのではないか。

江戸時代のこうした地域間交流の影響は、当時に限らず現代とも無縁ではない。往来物に記載される「女性ことば」について抽出整理してみると、使われなくなった語例もあれば、今なお継承され一般語となった語例も存在する。往来物は、文化遺産として大事に保存されてきたものでなく、実際に使われ消耗された資料群である。それゆえに庶民生活に根差した言語文化への影響は小さくなかったのではないか。

本報告では、地域に残存する資料の偏在および記載された「女ことば」の変遷事例を紹介し、言語文化形成の背景を考える試み

としたい。

休憩 (16時30分～16時50分)

共同討議 (16時50分～17時50分)

第二日 12月14日(日)

研究発表会 (9時30分～15時55分) A・B2会場

受付 9時～ (Zoom開場 9時15分～)

A会場 文学2号館5階 L2—51教室

(9時30分～12時30分)

「三輪の殿」の「朝戸」「殿戸」を「開く」——『日本書紀』歌表現の問題として——
敏達紀から崇峻紀にかけての皇位継承をめぐる記述について

同朋大学専任講師 山崎 健太
お茶の水女子大学大学院生 大熊かのこ

『枕草子』二月、官の司に「章段における清少納言と藤原行成のコミュニケーションの特殊性」

フェリス女学院大学大学院生 小野 結菜

『源氏物語』「落標」巻の「御子三人」予言について——紫上と明石の姫君との関わりをめぐって——

九州大学大学院生 高 恩娥

休憩 (12時30分～13時45分)

(13時45分～15時10分)

『夜の寝覚』第一部における女君の〈病〉試論——現代の診断基準を手がかりとして——

早稲田大学大学院生 前田みどり

横笛「柯亭」伝承の位相と漢故事受容

大阪公立大学客員研究員 妹尾 恵里

B会場 文学2号館5階 L2—52教室

(9時30分～12時30分)

短歌の記載形式論

〈侵入〉と〈揺らぎ〉——上田杉子『坩堝の中』における表象——

坂口安吾「村のひと騒ぎ」論——安吾初期作品と落語に着目して——

田地文子「猫の草子」を読む——芸術を懷疑する芸術家——

休憩 (12時30分～13時45分)

(13時45分～15時55分)

多和田葉子の文学における能——『うろこもち／Das Bad』を中心に——

村田沙耶香『コンビニ人間』における歪んだ語りの翻訳

近代文学における色彩語の使用——「外来語の飲食物名＋いろ」に注目して——

A会場 文学2号館5階 L2—51教室

(16時20分～16時50分)

研究発表奨励賞授与式

会場校挨拶

閉会の辞

第三日 12月15日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

青山学院大学大学院生 松本 瑞紀

一橋大学大学院生 大瀧 夕

明治大学大学院生 金井 雅弥

成蹊大学大学院生 寺田 峻

中山大学講師 邢 亜南

専修大学大学院生 渡邊 ゆりか

桃山学院大学教授 村中 淑子

武庫川女子大学准教授 井上 幸

明治大学教授 小野 正弘

全国大学国語国文学会 第一三二回大会

研究発表会 発表要旨

【A会場】

「三輪の殿」の「朝戸」「殿戸」を「開く」

——『日本書紀』歌表現の問題として——

同朋大学専任講師 山崎 健太

『日本書紀』「崇神紀」は「疾疫」の流行からの神の祭祀の制定を語り、その結果として「疫病始息、国内漸謐、五穀既成、百姓饒之」という解決を示す。それに続けておかれるのが、大神神社に関わる三首の歌を含む話である。

八年の夏四月の庚子の朔にして乙卯に、高橋邑の人活日を以ちて大神の掌酒とす。〈掌酒、此には佐介弭苜と云ふ〉

冬十二月の丙申の朔にして乙卯に、天皇、大田田根子を以ちて大神を祭らしめたまふ。是の日に、活日自ら神酒を挙げ、天皇に献る。仍りて歌して曰く、

A 此の神酒は 我が神酒ならず 倭なす 大物主の 醸みし
神酒 幾久 幾久 (15)

といふ。如此歌して、神宮に宴す。即ち宴竟りて、諸大夫等、歌して曰く、

B 味酒 三輪の殿の 朝戸にも 出でて行かな 三輪の殿戸

を (16)

といふ。茲に天皇歌して曰はく、

C 味酒 三輪の殿の 朝戸にも 押し開かね 三輪の殿戸を
(17)

とのたまふ。即ち神宮の門を開きて幸行す。所謂大田田根子は、今の三輪君等が始祖なり。

この内A歌に関しては、従来の歌謡転用論や、テキスト外の伝承を想定する読み方から研究が脱しつつあるといつてよい。しかし、BC歌に関してはそうした研究が進んでおらず、表現に関する考察も進んでいない現状がある。

本論はBCに共通する一旦「朝戸」と言語化した対象を「殿戸」と歌い直す構造からこれらの語に着目し、語の持つ様式性、また『日本書紀』テキスト内に示されている参照指示性から、これら二首の表現そのものが『日本書紀』テキスト内において構築されているものであり、文脈を構成する一部となっていることを論じるものである。

土橋寛「歌謡転用論」は棄却されたかに見え、実際に『日本書紀』歌表現をどのように捉え直すかの研究はその後十分な蓄積を見ない。『日本書紀』歌を表現とコンテキストから論じていく方法を提示することを本論の目標としたい。

敏達紀から崇峻紀にかけての皇位継承をめぐる記述について

お茶の水女子大学大学院生 大熊かのこ

『日本書紀』（以下『書紀』）敏達天皇条末尾から崇峻即位前紀にかけては、穴穂部皇子の策謀と、蘇我馬子、物部守屋の対立をめぐる記事が集中する。一連の記述は、「天下を取らむ」とした穴穂部皇子が、敏達天皇の殯の場面で「発憤」し（敏達十四年八月）、殯宮への侵入を試みた（用明元年五月）のを起点としている。後者は、炊屋姫（敏達皇后／後の推古天皇）を「姦」そうとする穴穂部皇子が三輪逆によって殯宮への侵入を阻まれ、守屋とともに挙兵して逆を殺すという記事である。本発表では、一連の記事について以下の二点に注目して論を進める。

(1) 「天下を取らむ」とする穴穂部が殯宮で炊屋姫（前皇后）を「姦」そうとしたという記述からは、どのような意味を読み取ることができるのか。

(2) 一連の記事には異伝を含め注が多く載るが、それらは『書紀』の文脈においてどのように機能しているのか。

(1) について、論者により理由付けは異なるものの、先行論では概ね前皇后との結婚が皇位争いに有利に働くためであると考えられている。しかし『書紀』テキストが提示する殯宮主宰者の権限や「姦」がもたらす結果に鑑みれば、炊屋姫を「姦」することそれ自体が皇位争いにおいて有利に働くというよりは、対立する炊屋姫の地位を押し下げることにより眼目があったと思われる。つまり、伊勢大神に仕えた皇女たちが「姦」されて任を解かれたのと同様、先帝の殯儀礼に従事する前皇后の地位が「姦」されることで揺ら

ぎ、殯宮主宰者として皇位継承の問題に関わる正当性が損なわれることを意図したものである。(2) について、一連の記事は全体的に皇后―群臣―他王族の権力闘争が女帝・推古に結実する過程を描出していると言える。そこには複数の注が存在し、その内のいくつかは異伝を載せる。これらの注はそれぞれに機能して、逆を殺した穴穂部皇子への「恨」や皇子の殺害が後の推古天皇の正当性を損なうことのないように構成されている。

『枕草子』「二月、官の司に」章段における清少納言と藤原行成のコミュニケーションの特殊性

フェリス女学院大学大学院生 小野 結菜

『枕草子』「二月、官の司に」章段では、藤原行成が清少納言に餅餠を贈ったことに端を発する一連のやり取りが記されている。従来、この章段は清少納言が贈られた「餅餠」に音を揃えて「冷淡なり」と返事をした機知が帝や行成に賞賛されたことを記す自讃譚として解されてきた。本発表では改めてその返事の仕方を見直すとともに、行成が餅餠に解文を添えて送った趣向や、清少納言が返事をするまでの経緯にも着目し、考察を加える。

『枕草子』において、漢詩文の知識に基づいたコミュニケーションを清少納言が行なっている例は数多く記されているが、その大半は特殊な漢語の使用や漢詩文の直接引用をしておらず、和歌や仮名に置き換えた表現になっている。男性官人と渡り合えるほどの漢詩文の教養があり、それを示しながらも、通常男性官人が行

う領域は避けようという意識がみられるのである。また、表現の方法を定子に相談したり、定子からの賞賛を求めたりすることが多い点からも、これらの表現があくまで定子サロンという女性のコミュニケーションでの評価を基軸としたものであるといえる。しかし、本章段では返事の方法を男性官人に相談している点、「冷淡」という漢語を用いて返答している点、賞賛者が男性のみである点など、他の章段における応答とは異なる点が多いことに注目したい。このような応答ができたのは、相手が行成であったことも関係しているのではないだろうか。

本発表では、まず当該章段の記事に含まれる複数の錯誤について、従来清少納言の知識不足と解されてきたことを再検討する。そして、他の章段での男性官人とのやり取りと比較して、本章段における行成とのコミュニケーションが特殊であることを確認したうえで、このようなコミュニケーションは相手が行成であるために成し得ていることを明らかにしていく。

『源氏物語』「濡標」巻の「御子三人」予言について

——紫上と明石の姫君との関わりをめぐる——

九州大学大学院生 高 恩娥

本発表では、『源氏物語』「濡標」巻の「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」の予言に対する源氏の認識を取り上げる。従来説では、当時の予言は絶対的なものであったとされ、源氏もそれに従う人物

とみなされている。ところが源氏は明石の姫君の将来を案じて京に迎えるものの、三人以外の子供は生まれないと考える描写はない。源氏は「后」の予言実現に向けては動くが、「御子三人」との制約には縛られていない可能性がある。実際に、「若菜下」巻で女三の宮の懐妊報告を受ける際の源氏は、夫婦関係の疎遠さや自身の年齢から彼女の懐妊を不思議に思うが、「濡標」巻の「御子三人」の予言は想起していない。源氏は予言を絶対的なものと捉えず、その実現に向けては自ら動くべきものとみなしており、「御子三人」について考慮しない源氏の態度は、予言の取捨選択に基づいていると考えられるのである。

その上で本発表では、紫上が明石の姫君を養女に迎える過程について再検討を行う。従来説では、紫上が養母に選ばれたのは、子を望めない存在であることが理由の一つとされている。しかし、源氏が予言を取捨選択したとする本発表の立場からは、養女にすることと紫上が子を産まない存在であることとの間には因果関係がない可能性が出てくる。予言以後、「薄雲」巻に至るまでの過程を分析すると、まず、源氏は姫君の「瑕」として、明石の上の身分と田舎出身であることを懸念している。大堰への転居によって、田舎出身という「瑕」は解消され、一方で母親の素性については解消されないため、紫上の養女にする選択をする。しかし、源氏はその後も紫上の子を望んでいることが確認できる。つまり、姫君の養母として紫上が選ばれたのは、あくまで「瑕」の解消に彼女の身分が必要だっただけで、判断の裏には「濡標」巻の予言は関与していないと考えられる。

『夜の寢覚』第一部における女君の〈病〉試論

——現代の診断基準を手がかりとして——

早稲田大学大学院生 前田みどり

二〇二五年は戦後八〇年にあたり、また阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件から三〇年が経過した、まさに日本社会のトラウマを振り返る年であった。戦争、災害、暴力は、人々の心に「口に出せない、unspeakable」(ジュディス・L・ハーマン「序」 中井久夫・阿部大樹訳『心的外傷と回復 増補新版』一頁、みず書房)ほどの大きな翳を落とし、場合によっては一生消えない傷となる。では、トラウマという概念が存在しない時代の人々は、語りえない心の傷とどのように向き合い、書き残してきたのだろうか。

本発表では、平安時代後期に書かれた物語文学である『夜の寢覚』の現存本文前半部分(第一部)に見られる、女性主人公(以下、女君)の心身症状をPTSD(心的外傷後ストレス症)の症状と比較する。『夜の寢覚』における心身の〈病〉については、これまで精神分析的なアプローチから解釈が試みられてきたが、女君が心身の不調に悩まされるようになった原因が物語序盤で望まない性関係であったことは無視されてきた。また、宮下雅恵「病と孕み、隠蔽と疎外——〈女〉の身体と〈男〉のまなざしをめぐって」(『夜の寢覚論 奉仕』する源氏物語『青簡舎』で論じられているように、言葉にできない女君の心の動きは、解釈可能なものとなるよう、妊娠や出産のもとに一元化されて他者にとらえられているが、その推移を現代医学の診断基準と照らし合わ

せてみると、女君の症状は悪阻の症状の現れ方とずれており、かつトラウマによる身体の反応をかなり正確に描出しているように見受けられる。

本発表は『夜の寢覚』を題材としたケーススタディであるにとどまらず、今後『夜の寢覚』において「何がどう語られているか」の議論をしていくための基盤を整えるべく、出来事を基準に『夜の寢覚』第一部において「どんな病が書かれているか」を明らかにすることを目指すものである。

横笛「柯亭」伝承の位相と漢故事受容

大阪公立大学客員研究員 妹尾 恵里

中世の書物には、宮中の宝物とされる楽器の由来を語る説話が散見する。本発表では、このような名器伝承の中から、横笛「柯亭」に関わるものを取り上げ、考察を加えたい。

「柯亭」は、院政期の『江談抄』に名がみえ、「葉二」「水龍」などとともに宮中の名器とされた横笛である。貴族日記類によると、十三世紀後半から十五世紀頃に、御遊などで使用されたことが確認できる。また、『看聞日記』等の記事から、伏見宮栄仁親王が後小松天皇に献上して御領安堵の対価とし、貞成親王がこの笛を珍重していたことも分かっている。しかし、すでにこの頃には楽器の名器の権威が衰退していたために、貞成親王のほかには「柯亭」の行方に関心がなかったという先行研究の指摘もある。この「柯亭」という名の由来は、『後漢書』に記される「後漢

の蔡邕が建物の椽からふさわしい竹を見出して笛を作ったところすばらしい名笛となった」という中国故事に求められる。十三世紀に成立した楽書『統教訓鈔』に至っては、この蔡邕の笛が日本に伝わったのだとする記載さえある。しかし、後漢の蔡邕の話は、十二世紀に成立した『蒙求和歌』、十五世紀成立の『三国伝記』等に確認できるものの、単に中国故事として記載されており、日本の横笛の名器に付随する説話としては語られない。

本発表では、先行研究をふまえて古記録類に残された名笛「柯亭」の記事を整理し、さらに「柯亭」説話の広がり考察することで、横笛「柯亭」が「葉二」「水龍」の跡を襲う「天下第一の笛」であった可能性について論じる。さらに、横笛「柯亭」には霊的な説話が付随しない点に着目し、そのことが名器の権威の衰えの象徴となっていることを指摘したい。また、「柯亭」説話の日本での受容の様相を考察することで、後漢の政治家・文人であった蔡邕が、「優れた素材を見出し世に送り出す人物」とイメージされている点についても指摘したい。

【B会場】

短歌の記載形式論

青山学院大学大学院生 松本 瑞紀

本発表は短歌の記載形式について書誌学的視点から考察する。現代で出版される歌集では、短歌は一首縦一行で記される。この形式は一般的な記載形式として使用され、書籍に限らずSNS

において短歌作品を発表する際も、画像中に歌を一行で書き記す例は少なくない。現代では短歌Ⅱ一行縦書きという意識が前提にあると考えられる。

しかし近代短歌集では短歌は基本的に改行のある形で記載されている。意味や語句の区切りに従っての多行書きではなく、単純に文字数上限での改行が行われる。ここでは短歌Ⅱ縦書きであるものの、一行書きの意識は見られない。

短歌の一首一行という形式を一般流通の書籍で実現したのは塚本邦雄と考えられる(第七歌集『星餐図』跋文に、一首一行組は年来の希望であり、これまで短歌表記上の或いは出版に関わる種々の制限から叶えられなかったとの旨が記される)。一般に塚本が起こした前衛短歌以降を「現代短歌」と呼称する。それゆえ発表者は短歌Ⅱ一行縦書きという形式は現代短歌の特徴の一つと見る。和歌研究において佐々木孝浩が、『新古今和歌集』以降の勅撰集を対象として和歌が記載される際の書式に着目している(『勅撰集の書式と表記の関係』2014)。行数や漢字表記の差異を検討し、和歌の読まれ方や印象への影響を示唆する。三十一音の短詩という定型において和歌に接続する短歌についても、記載の行数ほか表記形式は意識すべき問題といえる。

本発表では、近代短歌から現代短歌に移行する中で記載形式に変化が生じた理由として、例えば塚本邦雄の作風が、句切れで意味の断絶が起こる腰折風から、第六歌集『感幻楽』で変化し『岩波現代短歌辞典』塚本邦雄の項、小林恭二記述)、かつこの作品から一首一行書きが採用されたことに注目する。作風や歌の主題が記載形式を変化させたと考えられる。現代短歌の内容と記載形式には相関関係がある。

〈侵入〉と〈揺らぎ〉

——上田杉子『増埒の中』における表象——

一橋大学大学院生 大瀧 夕

上田杉子「増埒の中」(『処女地』第八号、一九二二年)は、列車という近代的移動空間を舞台に、主人公敏子が他者からの作用にさらされる姿を描いた小説である。敏子は列車内で学生の視線や隣席の女性の身体的圧迫を受け、さらに旧友宗五から、親しかった廣瀬の結婚を知らされる。物語の終盤では「恐しい声」が内面から響き、敏子は外部からの視線・言葉・身体的接触に加え、内面化された声によっても追い詰められる。こうした作用は身体や心に入り込み、違和感や圧迫感をもたらす〈侵入〉として表される。それによって敏子の自己認識は不安定化し、発表ではこれを〈揺らぎ〉と捉えて検討する。

本発表は、〈侵入〉表現を手がかりに敏子の内面を分析する。特に廣瀬の結婚話を聞かされる場面では、敏子は表面上は婚姻制度を当然視する言葉に不快感を示すが、その背後には廣瀬への好意や喪失感が潜み、制度批判の発言は感情を隠蔽する方便としても機能する。ここには感情と制度の二重性が交錯し、自己像に揺れが生じる。

分析方法としてはテキストを精読し、〈視線〉〈身体〉〈言葉〉〈内なる声〉の侵入の契機を整理する。その上で敏子の反応や語りの揺れを分析し、不安定化の過程を明らかにする。同時に、『処女地』で上田が小品に綴った家事や感情の自己点検といった記述にも触れ、彼女の作品世界に一貫する「身体経験の不安」と

「自己省察」の傾向を指摘する。

結論として、「増埒の中」は公共空間における女性の身体感覚と、感情と制度のはざまで揺れ動く自己を描き出し、その文学的意義を改めて考える契機を与え得る。こうした表現は『処女地』という女性雑誌の文脈で、読者に身体や主体形成の困難さを意識させ、無名作家上田杉子の文学的意義を再評価する手がかりとなる。本研究はこの視点を提示することで、近代女性文学に新たな考察の方向を開くものである。

坂口安吾「村のひと騒ぎ」論

——安吾初期作品と落語に着目して——

明治大学大学院生 金井 雅弥

坂口安吾「村のひと騒ぎ」(一九三二年)は、「風博士」(一九三一年)で注目を浴びた安吾が、『三田文学』という新たな舞台にはじめて発表した作品である。本作は、初期安吾の文学理念を語ったものとして知られる「FARCEに就つ」(一九三二年)との関わりから論じられてきた。「FARCEに就つ」において、「ファルス」という否定的に用いられがちだった概念を芸術的に重要なものとして位置付ける特異な主張を示す際、落語を繰り返し引き合いに出していたことや、「村のひと騒ぎ」の特徴から、本作は落語と何かしら関わるものと目されてきた。例えば、七北数人(二〇一九年)は語り口が落語に近いとしており、CHEN Xiaozhi(二〇二二年)は「遠回し」という表現形式が落語の影響を受け

たものだと見ている。しかし、本作と落語との関係を考えるためには、当時の読者や安吾にとって「落語」的とはどのような意味であったのかを確認する必要があるのではないか。本作の語りのような特徴が「落語」的だと捉えられたのかも、その点を踏まえて検討する必要があるだろう。例えば、本作については、同時代に、龍膽寺雄から「下手な落語にも及ばぬ」と評されたことが知られている。それがどのような意味であったのかもこうした検討を通じて明らかになるだろう。

本発表では、「FARCEに就て」や「ピエロ伝道者」（一九三一年）を手掛かりに安吾の落語観を明らかにし、本作の読解を試みる。なぜならば、これらは、安吾文学のキーワードである「ファルス」について書かれた重要なものと見なされているだけでなく、その中で落語が「ファルス」を語る具体例として持ち出されながらも、文学が模すべき「芸術」として積極的に評価されているからである。また、「村のひと騒ぎ」の大きな特徴である、語り手が聞き手に向かって語りかけているかのようなパフォーマンス的な要素との関わりにも注目しながら論じたい。

円地文子「猫の草子」を読む

——芸術を懷疑する芸術家——

成蹊大学大学院生 寺田 峻

本発表では、円地文子「猫の草子」（『群像』、一九七四年八月）を検討する。

円地文子「猫の草子」に関する先行研究では、「私」の老いに注目する読解や、志乃女の絵に触れたことで創作への新たな決意を得るという解釈が成されてきた。本発表ではこれらの先行研究に対し、志乃女が遺した「画帳の三冊目」の解釈を巡って堀井や矢口と「私」の間では相違が生じていることを踏まえ、志乃女による猫の草子の二面性を分析しつつ、「私」と志乃女の関係性を再検討したい。

具体的には、まず語りの形式について堀井と矢口に注目しながら検討を進める。本作は、一人称の「私」による語りと志乃女 of 状況を対象化した三人称の語りがシームレスに接続してある点が特徴的であり、その一人称と三人称の語りを接続するコードとして「私」の「想像」が働いている点を明らかにする。

こうした語りのあり方を踏まえ、物語の進むにしたがってすでに前景化する「私」の語りの内実を検討する。このとき、語る「私」は現実とフィクションナルな世界の落差を自覚的に認知しており、志乃女の自殺の秘密は、彼女が猫の世界（＝フィクションナルな世界）に取り込まれてしまったためだと考えている点を明らかにする。

さらに、志乃女が遺した猫の草子の人間／猫、春画／浄化などをはじめ対立的に二つの要素を語り出す二面性に注目し、改めて「私」と志乃女の関係性を問い直したい。「私」は志乃女が二面性のあわいを豊かに生きてきたことに気づきつつも、最終的には猫の世界に取り込まれてしまった志乃女とは異なる芸術家のありようを模索しているのだ。

この他にも「猫の草子」には、終末期にある生命をケアすることへの恐れと倫理をめぐる問題などが見られる。以上のような分

析によって、「猫の草子」において示された芸術と文学との関わりについて考えるとともに、円地文学を現代において読み直す可能性を示すことを本発表の目的とする。

多和田葉子の文学における能

——『うろこもち／Das Bad』を中心に——

中山大学講師 邢 亜南

多和田葉子の文学を論じる際には、ヨーロッパの文学的、哲学的伝統、とりわけドイツ文学からの影響が強調されてきた。しかし一方で、多和田文学における日本的な文学的要素がどのように表象されているか、またヨーロッパと日本がどのように融合されているかに注目した研究は比較的になく、多和田研究はヨーロッパ偏重の傾向を免れていない。本論は、このような傾向に対して批判的距離を取りつつ、多和田文学をヨーロッパ的な文脈に還元するのではなく、その内部に潜在する日本的想像力を析出し、ヨーロッパと日本が融合する様相を浮き彫りにすることを目的とする。その際に焦点を当てるのが能、とりわけ夢幻能である。夢幻能は、生者が夢の中で死者と邂逅するという構造を持ち、変身や亡霊、憑依といった主題を内包しているが、これらの要素は多和田の初期作品に共通するが、特に『うろこもち／Das Bad』に顕著に見出される。本作に関するこれまでの先行研究は、作中挿入される変身譚、顔や化粧をめぐる視線の力学、翻訳の問題、舌の喪失などについて論じてきたが、能との関連性を正面から扱った論考は

見当たらない。だがテキストを精読すれば、作中に挿入される変身譚、夢の中で死者と出会うことはもちろん、化粧を通して死者を映り出して、その声を書き記すことが憑依を想起させ、夢幻能と親和性を持つモチーフが繰り返し現れることに気付かされる。本論では、能「道成寺」を補助線としつつ、『うろこもち／Das Bad』を夢幻能の文脈に照らして分析を行う。そのことによって、多和田文学の内部に潜む日本的伝統の継承と変容を明らかにするとともに、多和田研究をより全面的な視点を提示することを試みる。

村田沙耶香『コンビニ人間』における歪んだ語りの翻訳

専修大学大学院生 渡邊ゆりか

村田沙耶香の小説『コンビニ人間』は、現代日本における「普通」という規範意識と、それに適応しようとする個人の葛藤を描いた作品である。本作の主人公・古倉恵子は、三十六歳にして未婚、長年コンビニのアルバイト店員として働く女性であり、コンビニという均質化された空間に身を置くことで安定を得ている。

恵子の語りは一見淡々と客観的に描かれているが、そこには彼女自身の世界観と社会的規範との大きな乖離が潜んでいる。例えば、彼女は「普通」に振る舞うために周囲の言動を模倣し続けてきたが、その姿勢は自己の不在を示すと同時に、言語表現そのものが社会的規範に絡め取られる過程を可視化している。つまり恵子の語りは、自己表現の手段としての言葉ではなく、社会的なコー

ドの反復にすぎない点で「歪み」を帯びているのである。

『コンビニ人間』は英訳されて世界で広く読まれているが (The Convenience Store Woman, 竹森ジニー訳)、語りのこの「歪み」は、翻訳の観点からも重要な問題を提起する。翻訳においてはしばしば、語り手の視点や社会的背景を異なる言語・文脈において再現することが課題となる。『コンビニ人間』の場合、恵子の語りは均質的でありながら、同時に社会からの逸脱を示す微妙な差異を孕んでいる。このバランスを翻訳でどう再現するかは大きな挑戦であり、単なる直訳では、日本語読者にとっては明瞭な、「普通」と「異質」の境界が曖昧化してしまう可能性がある。したがって本作の翻訳研究は、語りの歪み＝規範的な言語と主体の不在がもたらす表現のズレをいかに異文化において伝達できるかという問題を浮かび上がらせることに焦点をあてる。

つまり、『コンビニ人間』は、現代社会における規範意識と個人の在り方を問う作品であると同時に、翻訳において語りの歪みをどう扱うかという実践的課題を提示する作品でもある。本発表ではその両面を踏まえ、文学研究と翻訳理論の接点を探る。

近代文学における色彩語の使用

——「外来語の飲食物名+いろ」に注目して——

桃山学院大学教授 村中 淑子

日本語の語彙の変遷において、近代における外来語の導入は1つの大きなトピックである。外来語は様々な領域に入り込んでい

るが、本発表では、色彩語彙に注目する。色彩語は、ものの描写に欠かせない存在であり、日常的な使用頻度も高く、人々の生活において基本的かつ重要な語彙だと考えられるため、色彩語彙の領域へ外来語がどのように入り込んでいるかを調べることに意義がある。

色彩語彙における外来語には、ブルー、グリーン、グレー、ピンク、ベージュ、などの単純語のほかに、ブルーグレー、ローズピンク、ワインレッド、エメラルドグリーン、などの複合語もある。さらに、オレンジ色、レモン色、カーキ色、のような「外来語+いろ」という混種語の複合語がある。これらのうち、単純語や複合語については『青空文庫』パッケージを用いて調べた先行研究がある(村中 2015)。本発表では「外来語+いろ」、その中でも「外来語の飲食物名+いろ」の形態を持つ色彩語に絞って考察する。具体的には「チョコレート」「ココア」「コーヒ―」「ミルク」「クリーム」が「色(いろ)」を後部に伴って色彩語を構成した「チョコレート色」「ココア色」「コーヒ―色」「ミルク色」「クリーム色」等に注目する。これらを調べることにより、外来語が色彩語彙の領域に定着する過程を意味づける端緒としたい。

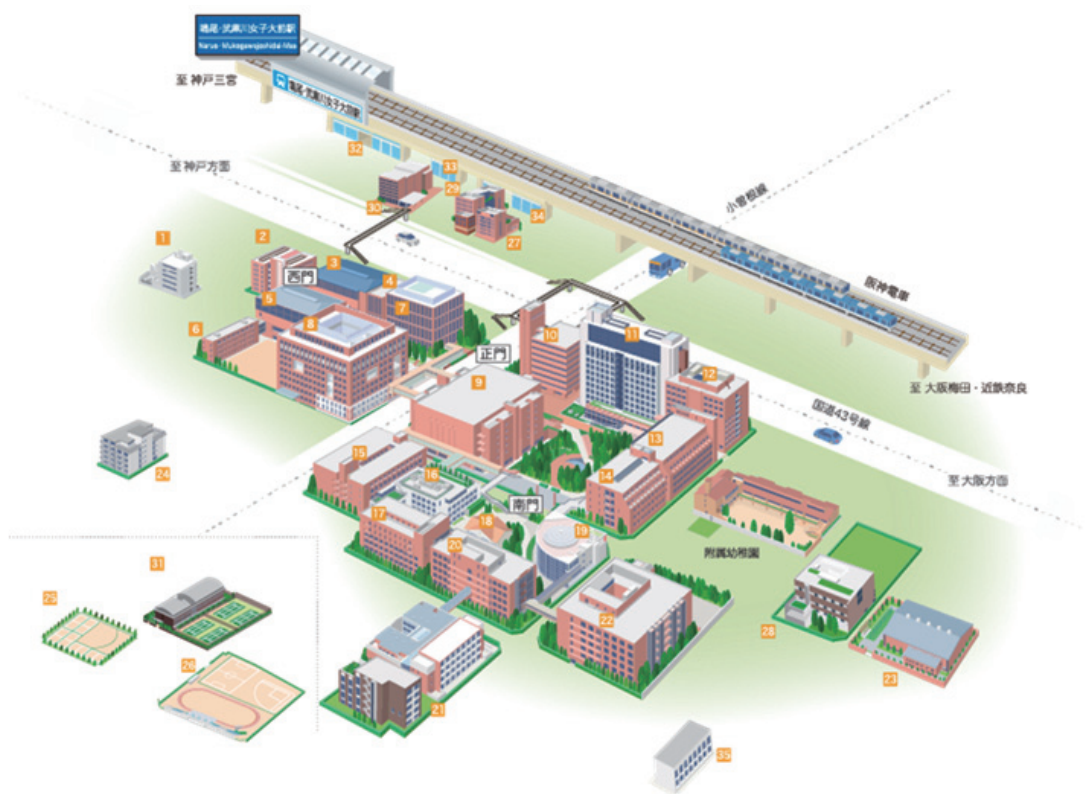
調査方法としては、国立国語研究所で作成された『青空文庫』パッケージ (16569 作品, 20250101) を全文検索システム『ひまわり』で検索する。青空文庫には多くの近代文学作品が収められているため、この方法で、近代文学における「外来語の飲食物名+いろ」の形の語彙の使用状況を、部分的にはあるが明らかにできよう。調査の結果、特定の作家に偏在する傾向が見られ、その理由についての考察も進めた。

○アクセス 阪神電車阪神本線「鳴尾・武庫川女子大前駅」下車 徒歩約7分



<https://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/campus/access.html>

○キャンパスマップ 武庫川女子大学中央キャンパス 正門より直進



https://www.mukogawa-u.ac.jp/campus/chuo_campus.html

- 大学の周辺にはコンビニがありますが、離れています。学生食堂も日曜日は閉店しています。お食事をご持参のうえ、ご来場ください。